

新田英治先生のご逝去を悼む

武内房司

二〇二一年末、学習院大学文学部史学科で長らく教鞭をとられた新田英治先生が亡くなられた。新田先生は学習院大学文学部史学科発足以来日本中世史を担当されてきた安田元久先生の後任として学習院大学に赴任された。私が一九九〇年に学習院大学に赴任して以来、先生とは、一九九八年に先生が退任されるまで八年間にわたり、史学科研究室の同僚としておつきあいさせていただいた。いつもほがらかな笑顔で接して下さり、柔和で大変お優しい先生だというのが、最初の印象であった。先生に限られないが、それぞれの先生方の個性が表れるのは卒論・修論の口述試験であろう。新田先生はつねにびつしりと細かな文字で記された小さなメモ用紙を片手に、口述試験に臨まれた。印象に残っているのは、大きなテーマ上の問題点から微細な表記上の誤りまで、実に事細かに、かつ丹念に指摘される先生のお姿であった。試問中、先生は「いろいろあるんですが、……」という言葉をよく発せられる。恐らく試問される側は、このあとに「今回はこの程度にしておきましょう」といった言葉が続く

ものと期待するのではないだろうか。しかし先生は、例のメモも最後に最後のページまでゆががせにせず、淡々と史料解釈の誤りから誤字・脱字にいたるまで指摘されるのである。こうした完璧さは、長年、東京大学史料編纂所につとめられ、常に正確な史料を提供する側に身を置かれた体験からくるのであろうか。

先生からは史料調査等で各地を旅行されたことなどもよくうかがった。実際、先生は日本全国くまなくと言っても良いほどに、足を運ばれていた。若いうちにできるだけ回ることでですよ、との言葉が記憶に残っている。そんな先生から、二度にわたり、アジアへの旅にご一緒しませんか、と声をかけていただいた。最初の旅行は一九九二年の夏で、中国の敦煌・嘉峪関を訪問した。先生のゼミ生に加えて、柳田節子先生、東京女子大学の山根幸夫先生らが参加された。

見学旅行を通じて特に印象に残っているのは先生の絶妙なペース配分であった。旅に出ると人は解放感からであろうか、はたまた外

国の新鮮な事物に心を奪われるせいであろうか、ついつい羽目を外しがちになり、体調を崩す。加えて移動につぐ移動である。日を重ねるにつれ疲労と不調を訴える参加者も増えた。ある意味で自然の成り行きといえるのかもしれない。しかし新田先生の場合、最後まで参加者と談笑され、行く先々で地元のお食事を楽しまれた。国内で何度も巡見旅行をこなされていたことのご経験が海外旅行にも生かされたのであろう。何度か同室させていただいたが、洗濯等も含め、旅の段取りも実にテキパキとしたものであった。

敦煌旅行の際、新田先生がどこにでもあり、何の変哲もない普通の壁に盛んにカメラを向けられていたのを目にした。何を撮っているんですか、とお尋ねしたところ、壁に描かれた落書が気になって、とのご返事。さすが中世史家だと思った。改革開放経済が進むにつれて拡大する格差は人々に大きな戸惑いや不安、さらには行政機関への不満などが高まっていた。今と違って当時はまだ当局の指定する「危険」語彙が自動で削除されてしまうシステムになっている。SNSのようなものはまだない。SNSは便利な反面、上からの厳しい統制も可能にする。これに対して、落書は長い歴史を持ち、そこには民衆の素朴な感情が表現されてきた。その後も何度も中国を訪れ、ユニークな落書を目にしたが、今になって思うと、もう少しまとまった形で落書類を記録しておけばよかった、と後悔している。

一九九五年の夏、今度は韓国の史跡見学旅行にご一緒されていた。釜山から入り、木浦、康津、全州、安東、ソウルと、バス・鉄道で韓国を南北に横断するという贅沢な旅であった。敦煌旅行と同様に柳田先生もご一緒された。

韓国は先生にとって特別な地であった。新田先生は、一九二七年九月、当時日本の植民地であった朝鮮京城府（現、韓国ソウル市）にお生まれになり、一九四五年、当時の京城公立中学をご卒業後、福岡高等学校を経て、一九五一年三月、東京大学文学部史学科を卒業され、大学院に進まれた。こうしたご経歴が示すように、先生は多感な少年時代を朝鮮で過ごされた。ソウルを流れるハンガンでよくスケートをしたこと、中学時代、酷寒の冬に当時の満洲に旅行された際の体験などをうかがった。

先生とご一緒したこの韓国への旅も思い出深いものであった。朝鮮総督府の建物が景福宮にまだ残っていた頃のことである。金泳三政権のもと総督府建物の解体がはじまる直前であった。この旅の数年前に単独でソウルを訪れたことがあったが、その際に、旧総督府の喫茶室は総督の執務室であったので是非見ておいた方がいいというアドバイスをくださったのも新田先生であった。なるほど喫茶室の窓からは景福宮を閉視できるようになっており、何とも旧総督府の権力の大きさ、傲慢さ、異様さを感じたが、こうした感覚は現地を訪れ、実際に建物の中に身を置かないとなかなかつかめない。先生が旅を重視されたのは、時代を超えて息づく現地感覚が、史料の表面的な文面の背後にある人々の生活や時代のうねりのようなものをつかむ上で頗る大切だと考えられたためではなからうか。

先生の想い出はつきませんが、長年にわたり学習院大学文学部史学科を支えて下さった先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。